

福井農林高校

「満月の夜に、ここで。」

2018. 12. 26 上演2

海岸。散らばったがらくたの中にアキラとサトルは倒れていた。やがて二人は目を覚まし、何気ない会話を繰り返す。別のところではある母親と娘が話している、娘が学校に行っていないことが分かり、やがてその理由も判明する。そして四者の関係までもが絡み合っていく……。

登場人物の関係性が分からない状態から話は始まり、アキラとサトル、母親と娘の会話から関係性や日本が原子力発電所での事故により人が住めなくなってしまうという過去、四者のつながりなどが少しずつ分かるという風にストーリーが巧みに展開されていた。それぞれのキャストが完全にその役になりきっていて、オーバーな動きから活力を感じたり、ストップモーションをしているところは本当に時間が止まっているように感じた。また、逃げてきた日本人が漂着するシーンでのアキラとサトルの動きは、荒れた海、そして、その海におぼれる人の様子が目に浮かぶようだった。その際に、海面に光が反射しているような照明はその情景をより鮮明に写しだした。母親とサトルの会話のシーンで、母親の顔には照明がよく当たって表情が見やすいのに、サトルの表情が読み取りづらくなっていたのは、生きている者ともうすでに亡くなってしまっている者との対比を表すためではないかという意見が出た。観客を巻き込んで舞台上に上がらせる演出がとてもおもしろく、ただ観客を楽しませるだけではなく、舞台上と客席の世界を一つにする効果があった。広い範囲に乱雑に置かれた木枠が、海岸の広さやアキラとサトルの送る生活が安らかとはいえないことをよく表現していた。またがれきにも岩にも見え、いすとしても使えるなど、とても応用性の高い装置であった。最後にその木枠を積み上げ、サトルとアキラの城を作るシーンから、二人が生きていく明るい未来が見えた。

原子力発電所が事故を起こす。そこから逃げてきた日本人を助けてやる。日本人の血が入っている娘を「放射能くさい」と虐げる。これらは全て人間のしたことだ。最初は他人を助けるのに、その人の素性が分かってくると差別したり迫害したりする人間の愚かさが、悲しい。アキラの言った「ボコボコにしたいやつ」というのは、単に彼をいじめた者や彼の嫌いな者だけでなく、日本を汚した負い目のある人間としての自分や、人間を差別したり迫害したりする人間のことを指すのではないだろうか。だが人間は所詮そんな生き物であり、そういった側面があるからこそ、希望を持って生きていくアキラやサトルのような人間の美しさが際立つのであろう。この劇は、そんな人間の二面性をよく映し出していたと思う。